



# 海外神社跡地から見た景観の持続と変容 台湾における営内神社等の調査

坂井 久能

(神奈川大学外国語学部 特任教授)

## はじめに

2013年11月21日から27日まで、台湾における海外神社跡地等の調査を行った。同行者は、当センター研究員の津田良樹、研究協力者の金子展也の両氏である。調査内容は大きく3つに分けられる。「神社」及び「社」、専売局・企業の神社、「営内神社」や陸軍墓地等旧軍施設の跡地調査である。

## 1. 「神社」「社」跡地の調査

「神社」及び神社に準じて公衆の参拝を認めた「社」の跡地調査として、台湾神社跡（現、圓山大飯店、新社殿跡）、台湾護国神社跡（忠烈祠、二・二八公園内の神馬）、花蓮港神社跡（忠烈祠）、吉野神社跡、宜蘭神社跡（忠烈祠）、霧ヶ岡社跡（徳龍宮、葉綉清氏から聞き取り）、魚地神社跡（瓊文書社、埔里図書館で資料調査）、南投神社跡（国立南投高級中学）、台中神社跡（中山公園）、嘉義神社跡（嘉義公園射日塔）、台南神社跡（新生里忠烈祠の狛犬、忠義国小で資料調査）、開山神社跡（延平郡王祠）、新化神社跡（虎頭埤園區、新化社跡）、東港神社跡（海濱國小）、芝山巖社（芝山公園）を訪ねた。

これら全てを報告するのは難しいので、既報を除いて特に印象に残った東港神社のみを報告する。同社は、東港郡初の「神社」として1935（昭和10）年に創建された。天照皇大神・大国魂命・大己貴命・少彦名命・北白川宮能久親王を祀り、1942年に無格社から郷社に昇格した<sup>(1)</sup>。鎮座地は、高雄州東港郡東港街東港（現、屏東県東港鎮豊漁里豊漁街）である。注目すべきことの第一は、1900（明治33）年に軍艦海門乗組員が東港で殉職したことを記念した碑を、同社建設を機に境内へ移転新設したことである。東港郡守が碑の建設委員長となって海軍大臣宛に提出した東港神社境内図が図1である。一辺5.58mの基礎に、地表からの高さ4.4mの巨大な「大日本帝國軍艦海門乗組將士殉職記念碑」が手水舎

の南に建設された。東港と帝国海軍との深い関係を物語るものといえよう。<sup>(2)</sup>

第二は、図1に見る帯状に長い境内が、現在海濱国民小学（小学校）の敷地として残っていることである。海濱国小は、1962年に台湾政府が神社跡地に建てたもので、1973～79年に鳥居等を除去し、1975年には神社本殿を孔子祠に改め、学校にあった孔子像を祀り、現在の孔子祠は1982年の建て替えという<sup>(3)</sup>。この鳥居等の除去や本殿を孔子祠に改めたのは、1972年に日本が台湾と断交したことにより、政府（内政部）が1974年2月25日に発した日本の神社遺跡や記念碑・石造物などの徹底的除去命令<sup>(4)</sup>に基づくものと思われる。現在、本殿跡に孔子祠が建ち（写真1）、石燈籠の多くは新しく建てられたものであるが、「昭和十一年十二月」銘のものが残り、また「一金貳千三百圓也 蔡朝取 蔡糞」など寄附金奉納を刻んだ石柱が3基建っている。そして、それらや神橋の遺構を含めたかつての帯状の神社空間がよく残されており、現地立つと、図1の境内図に描かれた神社の景観を思い浮かべることができる。



写真1 東港神社社殿跡。階段の手前に拝殿、階段上に中殿、さらに階段を上った孔子祠の場所に本殿があった。

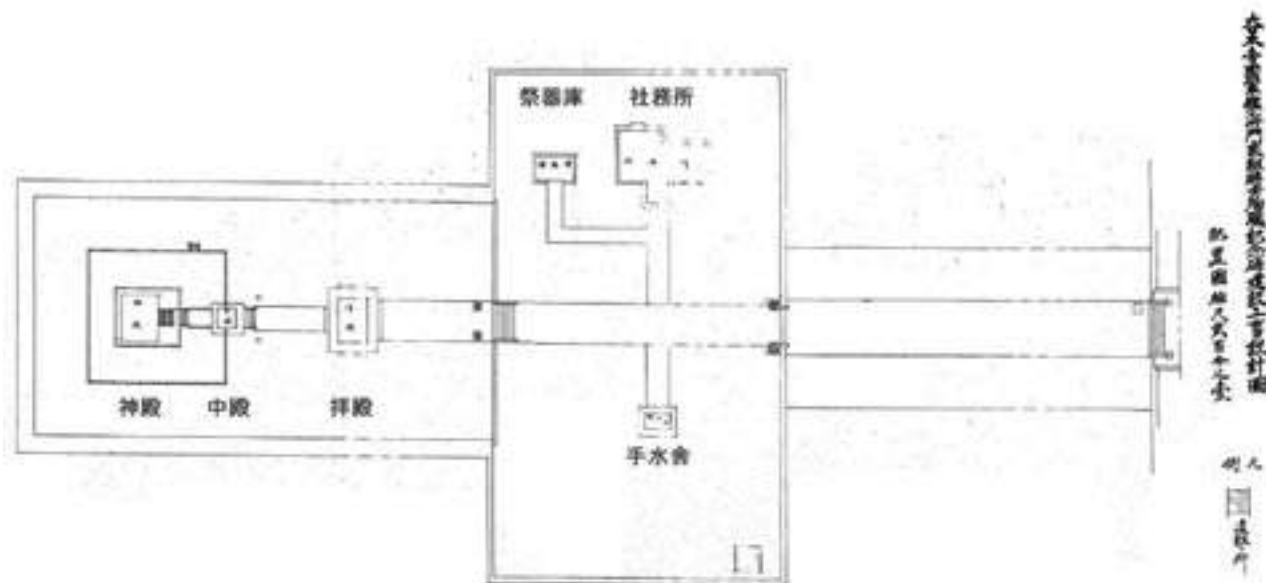


図1 東港神社境内図（大日本帝国軍艦海門乗組将士殉職記念碑建設工事設計図。原図を縮小し一部改変した。出典は注(2)）。社殿は略東南向きで、手水舎の右下の四角が海門記念碑の建設場所である。

## 2. 「専売局・企業の神社」跡地の調査

台湾総督府専売局の工場内神社として、台北酒工場（現、華山文化園区）の松尾神社跡、樟脳製造の台北南門工場（国立台湾博物館南門園区）の久須乃木社跡、花蓮港支局花蓮港酒工場（花蓮文化创意産業園区）の松尾社跡、宜蘭支局宜蘭酒工場（宜蘭酒廠）の松尾社跡、埔里出張所（埔里酒廠）の松楠社跡（写真2）、台中支局台中酒工場（台中創意文化園区）の松尾社跡、嘉義支局嘉義酒工場（嘉義文化创意産業園区。移転した民雄工業区の玉山高粱酒文化園区に神馬・狛犬を展示）の松尾社跡の7ヶ所を訪ねた。台湾総督府は、阿片・食塩・樟脳・煙草・酒類などの専売を行い、1901（明治34）年に各専売局を統合して台湾総督府専売局を設立した。酒類は1922（大正11）年からの専売である。これらの工場には、樟脳の場合は「久須乃木社」（樟社）、酒類は松尾社というように製造品にゆかりの神が祀られた。それらの跡地はほぼ確認できたものの、遺構は殆ど失われている。一方で、工場の施設・設備はよく保存され、文化创意産業園区等として活用されているのは興味深いことである。<sup>(5)</sup>

企業の神社として、台南市の林百貨店屋上に現存する林百貨店稲荷神社の遺構を訪ねた（前号で報告）。



写真2 埔里酒廠の松楠社跡。昭和11年鎮座の同社は大山咋神・熊野久須毘命を祀った。その跡地に壺を据え石燈籠を配している。

## 3. 「営内神社」跡地の調査

旧軍施設として、陸軍墓地跡（台北の圓山、台中、台南陸軍墓地）、兵営跡・営内神社跡（台中の台湾歩兵第一聯隊第三大隊、台南の台湾歩兵第二聯隊）、東港の日本軍魂廟・海軍兵舎跡等を訪ねた。ここでは、営内神社について報告する。



営内神社とは、軍隊の兵営内に建てられた神社のことで、隊内神社ともいわれ、上記の工場内神社や企業の神社と同じように「神社」でなく「神祠」であり、邸内神祠（屋敷神）と同類である。但し、軍用地に部隊長が陸海軍大臣に申請し認許を得て建設したことから、公的品格をもつものであったといえよう。

台湾では、台湾歩兵第一聯隊第三大隊（台中分屯大隊）の「護國神社」、同第二聯隊の「忠魂堂」、第五部隊の「営内神社」、澎湖島陸軍官舎内の「天南神社」、第二十震洋特別攻撃隊の「震洋神社」を確認しており、そのうち現地を訪れた2社について報告する。

### （1）台中分屯大隊の「護國神社」

台中分屯大隊は、1930（昭和5）年の霧社事件で討伐に参加し、4名の戦死者を出したことから、その霊を祀る祠を建設することになり、翌年4月、靖國神社の賀茂百樹宮司宛に祭神と社名について教えを乞う書翰を送った。賀茂宮司からは、社名を「護國神社」とし、伊勢皇大神宮・明治神宮・靖國神社の守札と四勇士の霊を併祀すればよいであろうとの回答があった<sup>(6)</sup>。社名の「護國神社」は、1939年の招魂社を護國神社と改称する制度改正以前のものとして注目すべきことである。また、同大隊は「乃木神社」という社名で営内神社をその時にほぼ完成させていたので（写真3）、なぜ敢えて社名を尋ねたのかという問題がある。乃木神社とは乃木希典を祀る神社であり、国内でも前後に各地で建設され、乃木はまた第三代台湾総督であったというゆかりがある。その社名に納得していなかったのは、台湾総督としての失

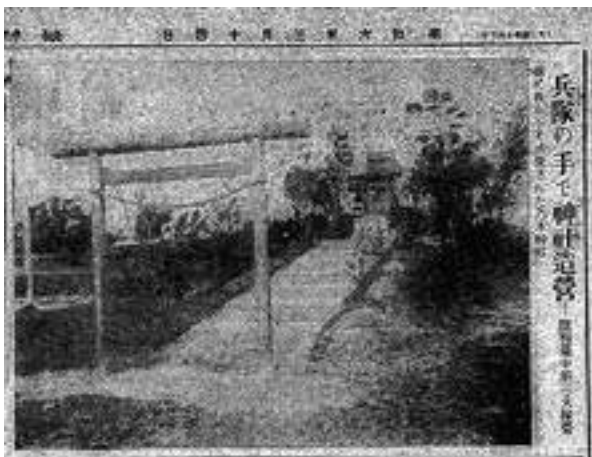


写真3 『臺灣日日新報』（昭和6.3.14付）掲載の乃木神社。

政ともいえる乃木像に起因するのかも知れない。護國神社の社名及び祭神の二宮一社の選定は、大隊長の書翰に記す「我國土ノ最南端国防ノ第一線ニ立ツ將卒ノ守護神」に基づくものと思われる。天照大神を主神にあげたのは、最高神で武神でもあることによるものであろう。

大隊の兵営跡は、台中駅の北東400m程の南京路・進徳路・自由路三段・雙十路一段に囲まれた辺りで、その広大な敷地は殆ど公園として整備されている。営内神社があった営庭の東端辺りも削平され、写真3のような微高地も見出すことはできなかった（写真4）。



写真4 台中分屯大隊の兵営跡。奥の木が茂る手前に護國神社があった。

### （2）歩兵第二聯隊の「忠魂堂」

台南駅に接した国立成功大学の光復校区は、旧台湾歩兵第二聯隊の土地・建物を使用しており、太い柱と赤煉瓦の建物群は荘重な雰囲気漂わせている（写真5）。営内神社「忠魂堂」は、将校集会所の前にあった。1914（大正3）年の太魯閣蕃討伐で戦病死した将兵33名を祀るため創建され、1919年に白蟻の害による再建にあたり、聯隊は総督を通して「天照大神宮ノ神靈ヲ合祀」したいと陸軍大臣に願い出た。しかし陸軍省副官は「天照大神ヲ合祀スルハ妥当ナラサルノ廉有之候」として英霊のみを祀るよう回答した<sup>(7)</sup>。陸軍省は、管理下にあった靖國神社の前賀茂宮司に尋ね、宮司は天照大神を英霊に合祀することを避けようとしたものと思われる（護國神社の場合は守札で祀ることで合祀を避けた）。かくして、神明造の営内神社に天照大神は祀られず、霧社事件では聯隊死没者18名を合祀して神式の慰霊を行った。



写真5 国立成功大学歴史系館（旧歩兵第二聯隊兵舎）。



写真6 復國建國碑（背後は旧将校集会所建物）。画像は成功大学所蔵1980年の卒業アルバム。



写真7 営内神社跡地。正面は将校集会所跡に建立した建物。

日本の敗戦後、兵営は中華民国軍に接収された。成功大学に移管された1966年には、営内神社の地に「復國建國」碑が建っていた（写真6）。碑は、営内神社の

基礎の上に建ち、碑銘の上には国民党の党章が刻まれていることから、建碑の主体は国（軍）であることがわかる。建碑年は不明であるが、台湾政府は戦後まもなく日本の神社や塔碑の除去をさかんに命じていることと碑銘から、1950年に蒋介石が総統に復歸して台湾中華民国政府が成立した時期が想起される。神社を壊して「復國建國」碑を建てることで、新しい中華民国の建国を象徴させたものと思われる。

碑は1980年代に取り壊され、跡地は駐車場となり、隣接して学生宿舎が建てられている（写真7）。

## おわりに

日本の敗戦後まもなくと1972年の台湾との断交が、台湾における神社の破壊の大きな画期であったようだ。それらを潜り抜けて今なお社殿や鳥居などを残しているところがある。近年は、文化資源として保存し、さらには活用する動きも見られている。台湾における神社の景観の変容は、その時々の日台関係をあらわしているということ、調査を通してあらためて感じた。

1週間にわたる調査では、特に国立成功大学歴史系の顧盼先生、建築系の蔡侑樺先生や張乃彰さんに現地を案内していただいた。蔡先生には、帰国後も復國建國碑を含めた資料を提供していただき種々ご教授を賜った。台北芸術大学の黃士娟先生・林承緯先生、台北師範大学の蔡錦堂先生にも多くのご教示を得た。霧社の葉綉清さんには、突然の訪問にも拘わらず、アルバムを見せていただきお話をうかがった。厚く御礼を申し上げます。

〔注〕

- (1) 台湾総督府文教局社会課『臺灣に於ける神社及宗教』昭和18年
- (2) 公文備考、昭和10年I兵器、卷10「廃兵器無償下付ノ件」防衛省防衛研究所所蔵
- (3) 蔡誌山「東港神社」（『東港采風第十二期』東港鎮文史學會、2002年）
- (4) 林承緯『金瓜石神社活化再利用規劃研究案結案報告書』（新北市立黄金博物館、2012年）
- (5) 工場の神社は、調査に同行した研究協力者金子展也氏が作成した資料を参照した。
- (6) 靖國神社所蔵『昭和六年 庶務書類』
- (7) 大日記二輯、大正8年「台湾歩兵第二聯隊忠魂堂改築ノ件」防衛省防衛研究所所蔵